

「平安文学、どれが流布本？なにが異本？－物語を中心に－」

ひとこと解説

(前期：2016.10.19～10.31／後期：11.1～11.19／＊は本学教員蔵)

**1 『源氏物語』大型本 賢木巻 断簡 伝藤原為家筆 鎌倉時代中期写 軸装1幅**

『源氏物語』のいわゆる「河内本」の最古写資料として、研究の相次いでいる断簡。元冊子本。通例を遙かに超えたその特大サイズに圧倒される。鎌倉周辺、金沢文庫周辺で制作された可能性あり。

**2 『源氏物語』大型本 薄雲巻 断簡 伝藤原為家筆 鎌倉時代中期写 軸装1幅**

1と同様の性格や特徴を持つ断簡。右端の大きな綴じ穴痕は、大型本であるがゆえの補強用か。

**3 『源氏物語』大型本 薄雲巻 断簡 伝藤原為家筆 鎌倉時代中期写 軸装1幅**

(2に同じ)

**4 『源氏物語』桐壺巻 断簡 一条兼良筆識語 室町時代中期写 古筆手鑑所収1葉**

桐壺巻の巻末部分。終わり4行の一条兼良による識語2種から、嘉吉3年に「親行正本」(＝河内本証本か)を、また文安2(1445)年に「(冷泉)為相本」を、兼良が校合していた事実が判明。

**5 『狭衣物語』巻一 断簡 伝蜷川親当筆 室町時代中～後期写 古筆手鑑所収1葉**

巻一の巻頭部分の断簡。書式も筆蹟も宮内庁書陵部蔵鷹司本(4冊揃)と酷似している。親子関係にあるうか。書写年代は当該断簡の方がおそらくは早いか。

**6 『狭衣物語』巻一 断簡 伝蜷川親当筆 室町時代中～後期写 軸装1幅＊**

5のツレであり、こちらは巻一の巻末部分の断簡。古筆切として巻頭・巻末がこのように揃うのは滅多になかろう。

**7 『大和物語』断簡 伝後水尾院筆 室町時代末～江戸時代初期写 古筆手鑑所収1葉**

これも巻頭・初段冒頭部分の断簡。承応2(1653)年刊・北村季吟『大和物語抄』付載章段(同抄以前で、この付載章段を持つ写本なし)と一致する本文が、ツレの中にあるという、注目すべき資料。

**8 『栄花物語』 卷二十七「衣の珠」断簡 伝冷泉為相筆 鎌倉時代末期写 軸装1幅**

これまた巻頭部分の断簡。現存するいずれの本文とも一致せず、ツレの出現が期待される。

**9 『枕草子』断簡 伝梶井蜻庵筆 室町時代後期写 古筆手鑑所収1葉**

『枕草子』の古筆切というのは極稀であったが、少しずつ見出されてきてもいる。これは3種目。もちろん新出。「文ことばなめき人こそ」の段。本文は能因本か。

**10 『竹取物語』断簡 伝後光厳院筆 室町時代写か 台紙貼1葉\* ◎後期のみ**

『竹取物語』の最古写資料。当該断簡の初紹介時、他のツレより書写年代がやや下るか・筆勢弱いか、と指摘されたが、以後の研究ではほぼ黙殺、その指摘の重要性に気づかれることはなかった。再考必須。

**11 『竹取物語』 江戸時代前期写 列帖装1帖**

近世以降の流布本の祖となった、古活字十一行本、また正保3（1646）年整版本に近似する一方、独自異文をも有する1本。誤写も多い由ながら、伝本分類に関する定説に対し、大きな問題を投げかけ得るか。

**12 『うつほ物語』 俊蔭巻 江戸時代前期写 奈良絵本 九曜文庫旧蔵 卷子本1軸**

俊蔭巻・単行の奈良絵本。もと横長の袋綴本を卷子改装。残欠本ながら、素朴で愛らしい挿絵3面が備わる。また本文にも少々の独自異文あり。

**13 『うつほ物語』 俊蔭巻 【元和～寛永】刊 古活字版 袋綴1冊 ◎前期**

川瀬一馬『増補 古活字版之研究』（1967日本古書籍商協会）のうち、元和寛永中刊11行本第1種口に相当する伝本。仮名で連続活字が用いられている。

**14 『伊勢物語』 伝小堀遠州筆 藤原定家筆模本 室町時代後～末期写 列帖装1帖**

小堀遠州による定家様の後代写本などではなく、定家真筆本を忠実に模写した1本にして、従来知られていた定家本のいずれとも異なる本文を持った重要伝本。今後の研究にいかにか活かすか。

**15 『伊勢物語』 伝安楽庵策伝筆 室町時代後～末期写 列帖装1帖**

定家本などと同じ125段本であるものの、現存するいずれの伝本とも一致しない独自異文を多量に有する、学界未知の、極めて注目すべき1本。さらなる精査が必要となろう。

**16 『参考伊勢物語』 屋代弘賢校 文化14 (1817) 年 恩頼館蔵板 不忍文庫旧蔵 袋綴3冊\***

『伊勢物語』本文の本格的な研究書。著者たる屋代弘賢自身の所持本そのものでもある。「為家筆本」など、現存不明となっている伝本数種との校合結果も示されており、現在なお資料的価値が高い。

**17 『伊勢物語』伝藤原為家筆本・佚文模刻 天保9 (1838) 年・詮丈 (屋代弘賢) 刊 1紙 ◎後期**

16所引の『伊勢物語』「為家筆本」における本文異同の、とりわけ顕著な部分を模刻したもの。弘賢は、考証資料をこのような一枚刷りにして、お年玉として毎年仲間内に配布していたという。

**18 『源氏物語』柏木巻・巻末佚文 文政4 (1821) 年 源 (屋代) 弘賢刊 1紙 ◎前期**

17同様、弘賢による「お年玉」一枚刷り。こちらでは『源氏物語』柏木巻の巻末佚文を掲載。弘賢の一枚刷りは他にも多数あったらしいが、今日ほぼ存否不明。その点でも17や18は貴重と言える。

**19 「源氏物語系図」 室町時代末期～江戸時代初期写 巢守三位本 折本1帖**

『源氏物語』理解の一助として、登場人物を系図の形で紹介・説明した「源氏物語系図」の1種。何と散佚「巢守」巻の登場人物と、他資料にない独自情報をも記載。資料的価値絶大。

**20 『紫明抄』残簡 伝称筆者未詳 鎌倉時代末期写 列帖装8丁分**

河内方の素寂による『源氏物語』古注釈書。残簡ながらも相当の古写を誇る。善本とされる京都大学文学研究科図書館蔵本と酷似しつつも、構成等に異同も存し、他本を含めた調査が必要。

**21 与謝野晶子『梗概源氏物語』自筆原稿 原稿用紙70枚分 折帖2帖 (改装)**

与謝野晶子による『源氏物語』梗概書 (あらすじ) の自筆原稿。未刊。すなわちこの21が天下の孤本。推敲の痕跡に加え、全ルビによって知られる独特な読み方など、みるべき点が多くある。

**参考 渡部栄『源氏物語 従一位麗子本乃研究』 著者旧蔵識語本 1936年 大道社刊 1冊\***

『源氏物語』古証本のひとつ「従一位麗子本」についての研究書。"一度紛失し博搜の末に神保町の一誠堂書店でついに邂逅"したという、渡部自身の書き入れがあり、その旧蔵書だったと知られる。

**22 『夜の寝覚』散佚部分 断簡 伝後光厳院筆 南北朝時代写 1葉\***

現存しない作り物語の一部分。『夜の寝覚』散佚部分か否かで論争が続いていたが、先頃『寝覚』作中歌を含んだツレがついに発見され、ひとまずの決着がつくこととなった。さて今後の展開やいかに。

**23 『浜松中納言物語』 卷二 江戸時代初期写 祖型本 九条家旧蔵 袋綴1冊**

卷二のみの残欠本ながら、現存伝本の祖本的な位置にあり、不備をも補う重要伝本。また同筆同体裁の九条家旧蔵本が次々と発掘され、大変な拡がりを見せるようになった、その契機ともなった1本。

**24 『唐物語』 江戸時代前～中期写 袋綴1冊**

『唐物語』伝本研究ではいまだ取り上げられていない1本。「写本云／文安元（1444）年八月十七日感得」の識語を持つなど、伝本としてはA類に属する。中でも名古屋大学本と近似しているか。

**25 『長恨歌』 [江戸時代中期] 写 川瀬一馬旧蔵 継紙4紙**

行書体で書きはじめ、第2紙後半より草書体になる。模写本の可能性もあるか。『長恨歌』の単行伝本というのは、眼にする機会が意外とないか。

**26～27 『長恨歌抄』 断簡 伝日野輝資筆 室町時代末期～江戸時代初期写 マクリ1葉\*・軸装1幅\***

清原宣賢『長恨歌抄』をほぼ和文化したもの。飛騨高山まちの博物館蔵「長恨歌注」（そのもの、もしくは類本）のような、宣賢抄の漢文部分をも相応に残した本を間に介しての派生本かと目される。

**28 『懐風藻』 天和4（1684）年・[京] 長尾平兵衛刊 袋綴2冊**

後白河院が至宝珍品を収蔵した「蓮華王院宝蔵」本を祖本としたもの。ページ数、改行位置、活字ポイント数の指定等から、塚本哲三編『新撰名家詩集』（1923有朋堂書店）所収テキストの底本と判明。

**29 『新撰和歌集』 [元禄8（1695）年・大坂・河内屋吉兵衛等3] 刊 後印 阿波国文庫旧蔵 袋綴1冊**

元禄8年刊本の刊記から、刊年及び三都の版元を削った後印本。外題に「八雲録内」とあり、当該『新撰和歌集』を含めた「八雲録」なる歌書のシリーズがあったらしいが、詳細不明。今後要注意。

**30 『土佐日記』 寛永20（1643）年・京・風月宗智刊 契沖手沢 彰考館・川瀬一馬遞蔵 袋綴1冊**

刊記「寛永二十歳孟春吉辰／二條通観音町風月宗智刊行」。契沖筆の考勘付箋の縫付けあり。また契沖関与は不明ながらも、種々の朱書き入れも多数。巻末に川瀬一馬入手時の経緯を記した1紙が追加。

**31 『土佐日記』 [寛永20（1643）年・京・風月宗智] 刊／京・出雲寺和泉掾求版後印 袋綴1冊**

寛永20年刊記を削り、「萬治二（庚子）初春吉祥日／〈寺町通圓福寺前町〉秋田屋平左衛門板行」と入れ木するなど、版木に種々手を加えた本を、さらに求版後印した1本。これぞ書誌学的な面白さ。